

令和3年度 メディア芸術連携基盤等整備推進事業
分野別強化事業

マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と
所蔵館ネットワークに関する調査研究
実施報告書

国立大学法人 熊本大学

令和4年2月

目次

第1章 事業概要	3
1.1 事業の目的（全体）	3
1.2 今年度事業の目的	3
1.3 実施体制	4
1.4 実施内容 各部会の概要	4
1.5 実施スケジュール	5
1.6 会議スケジュール	5
第2章 成果・課題・評価	7
2.1 各部会の成果	7
2.1.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究	7
2.1.2 所蔵館ネットワークの構築	7
2.1.3 刊本プールの有意性に関する検討	7
2.1.4 デジタルアーカイブ化の準備	8
2.1.5 マンガアーカイブ協議会の開催	8
2.2 各部会の課題	8
2.3 評価	9
第3章 実施内容	12
3.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究	12
3.2 所蔵館ネットワークの構築	13
3.3 刊本プールの有意性に関する検討	20
3.4 デジタルアーカイブ化の準備	22
3.5 「マンガアーカイブ協議会」の開催	23
3.6 実施会議内容	23
3.6.1 会議の詳細	23

目次

3.6.2 各施設における収書の範囲と方針	30
付録1 刊本アンケート分析	32
付録2 「刊本プール」検討事項	34

第1章 事業概要

1.1 事業の目的（全体）

本事業は、昨年度から継続する形で、文化庁「令和3年度 メディア芸術連携基盤等整備推進事業 分野別強化事業」の一環として実施し、マンガの「刊本」（＝単行本・雑誌）のアーカイブに関する拠点及びネットワークを構築するとともに、それぞれの活動を通じて得られた情報・知見・人材を共有・公開する機会を計画的に創出し、統合的かつ体系的な「マンガのアーカイブ」連携基盤整備の推進を目的とする。

具体的には、熊本大学を「マンガ刊本アーカイブセンター」の将来的な担い手と想定し、同様の目的を持ったマンガ（原画）のアーカイブに関する事業（「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」（以下、原画事業））と連携しながら、その実装に向けた調査研究、情報収集を行う。

上記の目的を達成するために、以下を事業全体の柱としている。

- ①日本のポップカルチャーの象徴であり、メディア芸術の核となるマンガの資料群（原画、刊本）の保存に関して、標準的・体系的な方法の確立に向けた調査研究を行う。全国の所蔵館と情報共有できる体制を整えるために、原画保存に関する相談窓口等を設けるとともに、所蔵館連携ネットワークの構築と強化を進める。
- ②本事業は、将来的なメディア芸術センター構想の実現を視野に入れることで、マンガに限らず、メディア芸術各分野の先行モデル・ケーススタディとなることを想定し、中期的に計画している。そのため、事業を通じて得られる課題の発見や解決のための情報・知見、そして人材については、広範に共有すべく、事業実施プロセス自体を可視化・アーカイブするための調査研究を始める。
- ③メディア芸術連携基盤等整備推進事業の趣旨を踏まえ、メディア芸術データベース（ベータ版）（以下、MADB）に登録された作品などの情報や原画・刊本の存在の発信を通じ、広く国内外に向けて、マンガをはじめとするメディア芸術各分野の価値創造に関して問題提起するための調査研究を行う。これに際しては、作家本人やその関係者、出版社など、「産」との連携の在り方を丁寧に検討する。

1.2 今年度事業の目的

上記のような目的の下、令和3年度の目的を以下の5点と設定した。

- 1) マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究
- 2) 所蔵館ネットワークの構築
- 3) 刊本プールの有意性に関する検討
- 4) デジタルアーカイブ化の準備
- 5) 「マンガアーカイブ協議会」の開催

第1章 事業概要

1.3 実施体制

表 1-1 実施体制

コーディネーター	鈴木寛之	熊本大学大学院人文科学研究部（文学系）准教授
統括アドバイザー	吉村和真	京都精華大学専務理事／マンガ学部教授
統括アドバイザー支援者	イトウユウ （伊藤遊）	京都精華大学マンガ学部特任准教授 国際マンガ研究センター
メンバー	橋本博	特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト代表／合志マンガミュージアム館長
	三崎絵美	明治大学 米沢嘉博記念図書館
	田中千尋	北九州市漫画ミュージアム図書担当
	渡邊朝子	京都国際マンガミュージアム学芸室司書
	日高利泰	熊本大学文学部准教授
	池川佳宏	日本マンガ学会理事

連携機関：北九州市漫画ミュージアム（以下「北九州 MM」）、京都国際マンガミュージアム（以下「京都 MM」）、国立大学法人熊本大学、特定非営利活動法人熊本マンガミュージアムプロジェクト（以下「クママン」）、合志マンガミュージアム（以下「合志 MM」）、明治大学 米沢嘉博記念図書館 [50 音順]

1.4 実施内容 各部会の概要

1) マンガアーカイブ協議会

原画事業・刊本事業相互の情報共有及び意見交換を行う。

2) マンガ刊本ネットワーク会議

刊本ネットワーク施設による情報共有及び意見交換、「刊本プール」の運用の仕方と今後の展望の検討、マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた刊本ネットワークの形成を目的として開催する。

3) マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会

将来設置が必要と考えられるマンガ刊本アーカイブセンターが行うべき事業内容の検討（刊本の収書方針と範囲の検討、機関連携による刊本保存・活用計画の立案）、複本利活用事業の在り方の検討などを行う。

4) 刊本プール検討会議

刊本アーカイブ事業に益する刊本プールの在り方や、その運営のための実務的な作業マニュアルを作成するために必要な事項の検討を行う。

第1章 事業概要

1.5 実施スケジュール

スケジュール	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
① 刊本センターの実装化に向けた調査研究		→							
② 所蔵館ネットワークの構築		→							
③ 刊本プールの有意性に関する検討		→							
④ デジタルアーカイブ化の準備		→							
⑤ 「マンガアーカイブ協議会」の開催		→					→		

図 1-1 実施スケジュール

1.6 会議スケジュール

① 第1回マンガ刊本ネットワーク会議

日時：令和3年6月1日（火） 14：00～15：30

開催：WEB会議（Zoomにて開催）

② 第1回マンガアーカイブ協議会（原画・刊本合同会議）

日時：令和3年7月16日（金） 10：00～12：00

開催：高知まんが BASE 会議室、並びに WEB 会議参加（Zoomにて開催）

③ 第1回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会

日時：令和3年8月24日（火） 10：30～12：00

開催：WEB会議（Zoomにて開催）

④ 第1回刊本プール検討会議

日時：令和3年9月10日（金） 10：00～12：00

開催：WEB会議（Zoomにて開催）

第1章 事業概要

⑤第2回マンガ刊本ネットワーク会議

日時：令和3年10月23日（土）

開催：10：00～11：30 熊本大学文・法学部棟4階 現代文化資源学学生研究室（H429号室）

13：00～14：30 熊本大学くすのき会館 レセプションルーム

15：00～16：30 熊本大学くすのき会館 レセプションルーム

⑥第2回マンガアーカイブ協議会（原画・刊本合同会議）

日時：令和3年12月14日（火）15：00～17：00

開催：熊本大学文法学部棟2階 共用会議室（H242号室）並びにWEB会議参加（Zoomにて開催）

⑦第2回刊本プール検討会議

日時：令和4年1月11日（火）10：00～12：00

開催：WEB会議（Zoomにて開催）

⑧第2回マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会

日時：令和4年1月11日（火）13：30～15：30

開催：WEB会議（Zoomにて開催）

第2章 成果・課題・評価

2.1 各部会の成果

2.1.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究

将来設置が必要と考えられるマンガ刊本アーカイブセンターが行うべき事業内容の検討（刊本の収書方針と範囲の検討、機関連携による刊本保存・活用計画の立案）、複本利活用事業の在り方の検討などを行った。

具体的には、事業計画とロードマップの策定に向けた基礎調査として、本事業における有識者検討委員のアドバイス等を受けながら、以下のテーマの実施を検討した。

- ・「マンガ刊本アーカイブセンター」「刊本プール」事業内容の検討と報告書の作成（収書方針・範囲の検討、機関連携による刊本保存・活用計画の立案、複本利活用・収益事業の実施）
- ・「マンガ刊本アーカイブセンター」の運営体制及びコスト・収入等に関する具体的なシミュレーション

2.1.2 所蔵館ネットワークの構築

昨年度に引き続き、熊本の「刊本プール」から、連携施設である「高知まんが BASE」に刊本（雑誌）資料を移送すべく資料を選別した（コロナ禍の影響により実際の移送は延期された）。また、要望のある他連携機関に移送可能な刊本資料を選別し、「刊本利活用 BOX」を用いて分類・整理を継続中である。

熊本県内では、森野倉庫の刊本資料をパッケージ化し、合志 MM（合志市）、くまもと文学・歴史館（熊本市中央区）、健軍まんが図書室（熊本市東区）、くまもと松尾西小マンガ館（熊本市西区）、セキアヒルズ「ホテルセキア」ロビー図書コーナー（玉名郡南関町）などの施設に移送し活用した。刊本資料をアーカイブする意義については、県内を中心に自治体・公共図書館などで理解が深まりつつある。

また、公立図書館・大学図書館等を含む連携候補先のリスト化を行い、高知まんが BASE ほか全国に呼び掛けて「マンガ刊本ネットワーク会議」を開催した。

さらに、昨年度に大学図書館・マンガ関連施設等を対象に実施した刊本収蔵に関するアンケートの分析を行った。

大学、特定非営利活動法人、マンガ関連施設、図書館等が連携した刊本アーカイブ活動の実施及び報告書の作成を行った。

2.1.3 刊本プールの有意性に関する検討

刊本プールからの「正本」（＝永年保存用刊本資料）の抽出に関して生じる問題、及び国内外への刊本資料の再配分（整理・発送）に関して生じる問題について議論した。

2.1.4 デジタルアーカイブ化の準備

クママンがこれまで行ってきたアーカイブ事業について、メディア芸術コンソーシアムJV事務局（以下、事務局）からヒアリングを受けた結果、情報の整理統合を図る機会が創出できた。また、今後の刊本プールの蔵書リスト作成に当たって、メディア芸術データベースとの連携の道筋ができたことは、大きな成果となった。

メディア芸術データベースとの連携を見据えたマンガ刊本アーカイブにおけるメタデータの検討や、実装化の上で必要となる業務内容などについて、事務局のメディア芸術データベース関係者とともに協議する連絡会議を実施した。

2.1.5 マンガアーカイブ協議会の開催

昨年度に立ち上げた原画、刊本両事業の合同会議である「マンガアーカイブ協議会」を2回（7月と12月）開催し、うち第2回会議（12月14日）を主催した。それぞれの所蔵館が抱える喫緊の課題について意見交換がなされたほか、効率的な情報共有の仕組み作りや原画・刊本両センターの窓口機能を接続する総合窓口を設ける必要性など、来年度以降の検討課題についても幾つか具体的に提起された。

マンガの原画と刊本は、資料の価値付けや活用方法において表裏一体の関係にあることを今一度確認した上で、本協議会では原画と刊本の両事業における課題と可能性を相互参照し、マンガ分野全体に貢献する体系的なアーカイブの在り方を検討した。

2.2 各部会の課題

1) マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究

今年度は、「マンガ刊本アーカイブセンター」の目的について議論した。原則的には、アーカイブに関する「相談窓口」に徹し、実際のモノが（一時的に）収集されるスペース（「刊本プール」）の運営には直接関与しない形を目指す基本姿勢が確認されたが、それに代わるスペースの確保に関しては、現在各方面に協力の呼び掛けを検討中である。

また、センターの運営体制及びコスト・収入等に関する具体的なシミュレーションも今後の課題である。

2) 所蔵館ネットワークの構築

上記のような実際のモノの収集スペースの確保のためにも、既にマンガを所蔵、あるいは今後所蔵したいと考えている施設や機関とのネットワーク構築が急務であると確認された。昨年度に実施した公共図書館へのマンガアーカイブに関するアンケート結果を手掛かりに、そうした施設の開拓を進めるのが今後の課題である。

当初は、そうした施設に、マンガ刊本アーカイブセンターと連携した「刊本プール」で準備したモノを用意するやり方も想定していたが、今後は例えば、「公共図書館が所蔵すべきマンガ本リスト」や「その地域出身の作家リスト」「その地域が登場するマンガ作品リスト」とい

第2章 成果・課題・評価

った情報のみの提供も視野に入れることが確認された。そのための研究や、情報収集の仕組み作りが今後の課題である。

3) 刊本プールの有意性に関する検討

「刊本プール」の事業内での位置付け、これまでの実績と課題について検討を行った。マンガ刊本アーカイブセンター・所蔵館ネットワーク事業全体における正本複本の判断基準は、様々な立場からの視点が必要であり、これからの要検討課題である。事業全体の「保管」「活用」の検討と同時に、現在の刊本プール（森野倉庫）の整理の第一段階としてごく簡易な仕分を実施し、保管すべき資料を迅速に絞り込む作業は、今後のアーカイブやネットワーク参加館の参考になり、事業全体にとって有益だと考える。

4) デジタルアーカイブ化の準備

メディア芸術データベースとの連携を進めつつも、所蔵館ネットワーク構築のための一つの肝となる、それぞれのマンガ資料をどこが所蔵しているかが分かる効率的な蔵書データの整備・共有のためのツールなどが別途必要ではないか、との議論になった。これを事業内で具体的にどのように確保していくかは、今後引き続き検討していくべき課題である。

5) 「マンガアーカイブ協議会」の発足と開催

マンガ刊本及び原画のアーカイブ関連施設や、これら施設を活用したいと考える自治体との人的ネットワークは構築されつつあるが、これは言わばマンガ「(狭義の) ユーザー」のネットワークである。今後は、マンガ刊本や原画を実際に製作している出版社やマンガ家とも議論を行い、マンガ作品の「供給者」にとっても意義のある(広義の)アーカイブを目指す必要がある。

2.3 評価

本事業は今年度、マンガ刊本のアーカイブに関する拠点及びネットワーク形成のための5か年計画の2年目に当たる。5か年度計画における最終目標は、熊本大学を担い手とする「マンガ刊本アーカイブセンター」の実装化と運用開始であり、今年度は、この最終目標に向けて、同センターの目的・機能を議論しつつ、その体制整備が目的であった。

体制作りにおいては、これまでの事業でも協力関係にあった施設・機関から、より「現場」に近いスタッフを事業メンバーに迎えた結果、より現実的で実践的な議論を進められた。こうした事業の進め方自体、令和2年度に先行して実装化された「マンガ原画アーカイブセンター」と、同センターを中心とするネットワークが構築されるまでのプロセスを参考にしている。

今年度の大きな成果の一つは、「マンガアーカイブ協議会」というテーブルを設定し、これまで理念として掲げていた、マンガ刊本アーカイブとマンガ原画アーカイブの両事業を“両輪”とするアーカイブ体制を推進し、今後の連携の在り方についての協議を一層進めたことだろう。今後は、全体会

第2章 成果・課題・評価

議としての「協議会」だけでなく、具体的なテーマを課題とする分科会においても、両事業のメンバーが意見を交わせる会議体を増やしていくとの方針が共有された。また、刊本を産官学連携で保存・利活用する試みの一環として、熊本県に「マンガ県くまもと協議会」が組織されたが、今後の刊本アーカイブセンターとの連携が期待される。

今年度は、昨年度末に課題として挙げられた下記の点について、具体的に議論し、来年度以降の具体的な方針を抽出した。

A) 「刊本プール」の位置付けの再考

「刊本プール」は、国内外におけるマンガ本の再配分のハブ（寄贈を受け入れ、別の施設に再寄贈するための一時置場）として構想された。実際に受入れを始めると、圧倒的な物量の資料が寄贈され、整理して再寄贈する作業が追いつかないと判明した。マンガ刊本アーカイブセンターが、刊本の再配分の調整を目的の一つにするとして、実際のモノも管理していけるのか再考が必要、との結論に至った。今後は、モノとしてのマンガ本の「プール」機能の外部化を目指し、そのために、来年度は、受入れ～整理～再寄贈という当初構想していた機能が正常に働いた場合のコスト計算を行うための作業実験を行う計画とした。

B) ネットワーク間データベース／所蔵館リストの構築について

ネットワークに参加する施設が、それぞれどのような資料を所蔵しているか確認できるデータベース／所蔵館リストの必要性が議論された。データベースに関しては、マンガ原画のデータベースとの連動の重要性も確認されたが、そうした機能も備えたデータベースの活用に向けて、メディア芸術データベースをはじめとして、複数の既存のデータベースの調査を、来年度以降本格的に行っていく運びとなった。

C) アーカイブ資料の損壊について

全国の連携館のネットワークの中で刊本をアーカイブできたとしても、施設によっては、その資料を消耗品として扱うところが出てくるだろう。「資料のアーカイブ」の実際に関する、施設間における差異について、今後より細かい調査が必要と確認された。具体的には、（京都国際マンガミュージアムや明治大学 米沢嘉博記念図書館のような）「永年型アーカイブ」施設と、一般の市立図書館の開架図書のような「消耗型アーカイブ」施設のある点が議論された。マンガ刊本アーカイブセンターとしては、両者のアーカイブに対応する体制の構築が課題となることも判明した。

D) (マンガ刊本アーカイブセンターを維持していくための) 収益の問題

将来的な問題ではあるが、いずれ現実的かつ具体的な解決方法を見いだす必要があると確認された。議論の中で、一つの参考とされたのは、原画アーカイブ事業で実験された展覧会のパッケージ化とその販売である。来年度以降、原画事業と協働しつつ、刊本アーカイブを活用した展覧会制作の可能性を協議していく予定とした。

上記は全て、来年度以降に議論していく予定となっている、マンガ刊本アーカイブセンターの目的・機能・組織の明確化、明文化作業のベースともなった。

第2章 成果・課題・評価

昨年度と同様、今年度も、コロナ禍のため、対面によるネットワーク作りは困難だったが、オンライン会議を軸にメンバー間で定期的にミーティングを実施でき、結果的に理解が深まった論点も少なくなかった。全体として、5か年計画の2年目として必要な検討は実施できたと評価できる。

第3章 実施内容

3.1 マンガ刊本アーカイブセンターの実装化に向けた調査研究

今年度は、先行する「マンガ原画アーカイブセンター」（横手市増田まんが美術館）をモデルにしながら、近い将来設置が望まれる「マンガ刊本アーカイブセンター」の姿と果たすべき役割についての検討を重ねた。その結果、「マンガ刊本アーカイブセンター」を中心とする「刊本プール」「マンガ刊本アーカイブネットワーク」構想を、以下の図のようにまとめた。

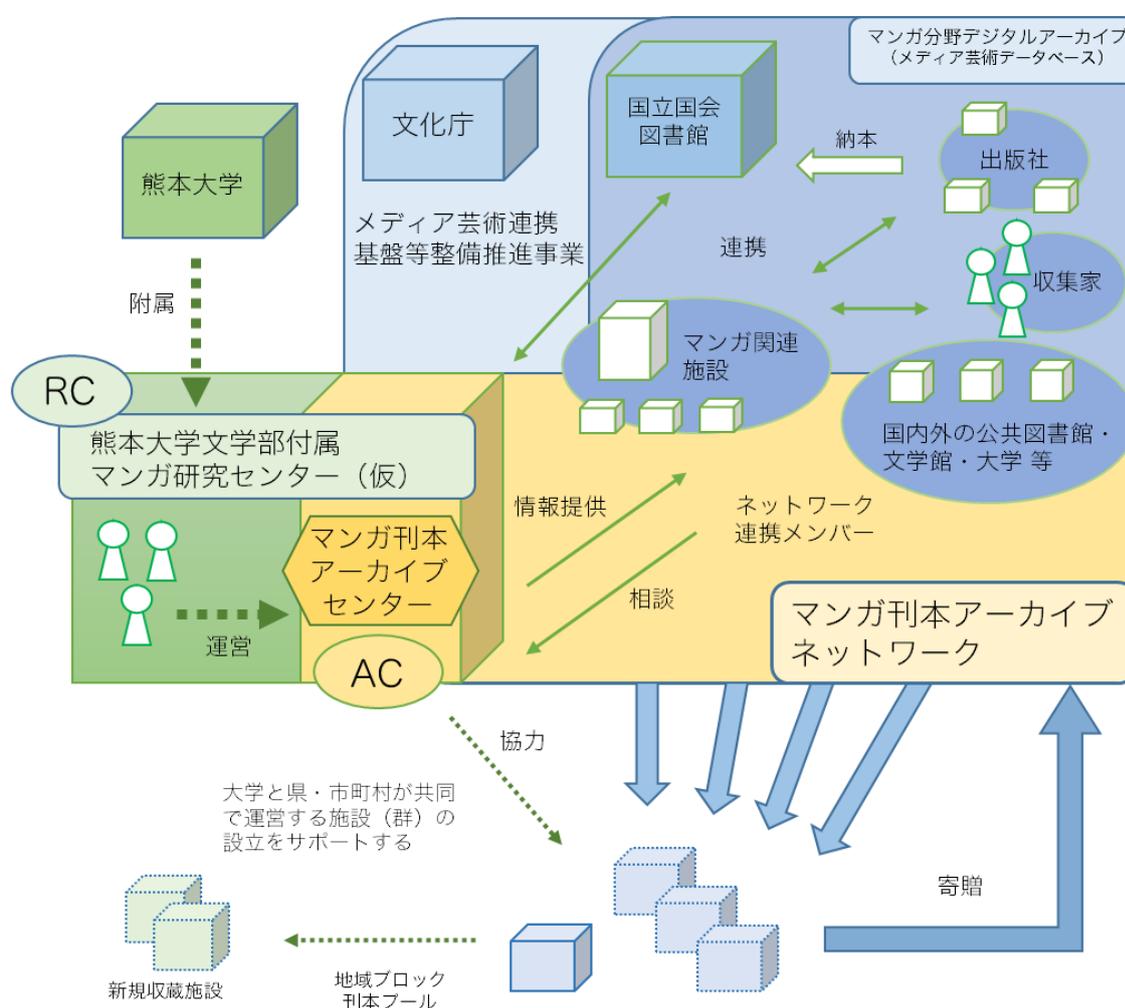


図 3-1 「マンガ刊本アーカイブセンター」の役割

「マンガ刊本アーカイブセンター」の構想については過年度に引き続き議論が重ねられ、求められる機能や役割、組織の体制について論点が整理されつつある。これらの構想は「マンガ県くまもとシ

第3章 実施内容

ンポジウム」(令和3年10月24日開催)などでも紹介され、大学、自治体、企業の連携の下でマンガのアーカイブを地道に進めていくための前提が共有されたと言えるだろう。

現時点での構想の全体像は図に示したとおりである。「マンガ刊本アーカイブセンター」は熊本大学文学部附属マンガ研究センター(仮称、令和4年10月設置予定)が運営の受皿となり、①刊本に関わる諸問題の相談窓口業務、②刊本の取扱いに携わる専門人材の育成、③刊本アーカイブネットワークのハブ拠点、④刊本の収集、保存、活用(の計画立案)といった機能を担う。「マンガ刊本アーカイブセンター」自体が大量の刊本を直接所蔵するのではなく、ネットワーク内の連絡・調整を主たる目的としている点には注意しなければならない。

3.2 所蔵館ネットワークの構築

【刊本資料の移送と活用】

マンガ関連施設のネットワークを強化するためにも、既存のデータベースも利用しながら、施設間での効率的な蔵書データの整備・共有の在り方を探っていく必要がある。

熊本県内では森野倉庫の資料を活用したマンガ関連施設は順調に増加しており、今後は連携イベントの実施なども構想中である。今年度は、合志 MM(合志市)、くまもと文学・歴史館(熊本市中央区)、健軍まんが図書室(熊本市東区)、くまもと松尾西小マンガ館(熊本市西区)、セキアヒルズ「ホテルセキア」ロビー図書コーナー(玉名郡南関町)、くましばマンガ図書室(令和3年12月設置・人吉市)、合志市や上益城郡益城町の小中学校などの施設に移送し活用した。くまもと松尾西小マンガ館は市内の廃校を利活用した施設で、令和2年7月に開館した(当初4月開館予定がコロナ禍のため延期)。開館後も地域の方々の協力を得ながら資料移送を継続している。



図 3-2 くましばマンガ図書室(令和3年12月設置・人吉市)



図 3-3 益城中央小学校（熊本県上益城郡益城町）

【刊本プールにおける刊本資料の保存と利活用】

●事業の概要

- 拠点地 熊本市中央区森野倉庫
熊本市西区 旧松尾西小学校（くまもと松尾西小マンガ館）
- 実施期間 令和3年7月～令和4年2月
- 内容 刊本の保存と利活用の検討
国内外への刊本資料の再配分（整理・発送）



図 3-4 刊本プール（熊本市中央区 森野倉庫）



図 3-5 刊本プール（熊本市西区 くまもと松尾西小マンガ館）

●単行本整理手順

- ①属性（性別、年齢別、ジャンル別、特定作家別など）出版社、レーベル、作家別 50 音順に並べる。
- ②複本の中からセットに組めるものは特注のセット用段ボールに収納し、これを所蔵館ネットワークを通して国内外に配置できるよう準備しておく。
- ③セットに組めないものはバラ本用の箱に詰める。バラ本は不定期に開かれる譲渡会などで放出して在庫量を調整する。

●今年度の成果と課題

刊本プールでの作業

これまで刊本を収蔵してきた森野倉庫のスペースが逼迫 [ひっぱく] してきたため、今年度は単行本の一部をくまもと松尾西小マンガ館に移し、雑誌の一部を高知県の施設に送付する準備を進めた。

①単行本

成果

森野倉庫では段ボール 100 箱（1 箱に 50 冊として 5,000 冊）、松尾西小では B6 判単行本（青年、女性向け）の段ボール 50 箱（2,500 冊）、合計 7,500 冊を分類整理した。

複本は刊本プールに移し、このうちセット本に組めたのは約 3,000 冊で、セット化率は 40%であった。今回刊本プールにあった本は貸本屋からの寄贈本が多くセットに組みやすかったが、通常の寄贈本の場合はもっと下がると予想される。

第3章 実施内容

3,000冊のうち300冊は合志市内の小中学校の図書館に貸し出している。

課題

7,500冊の本を分類整理し、1,500冊の正本を抽出し、3,000冊のセットを作るのにかけた時間は作業員1人で5か月（毎日4時間、週4日）であった。今回は試験的に刊本プールでのセット作りを行ってみたが、時間も人数も必要な作業であり、今後複本の利活用の方法を計画する上で考慮する必要がある。

また来年度は、無作為に選んだクママン所有刊本50箱（2,500冊）を作業員1人で分類整理し、正本を抽出してリスト化、刊本プールからセット化するのに必要な時間についてシミュレーションを行いたい。

その数字を根拠として今後はほかの地域でも同様の作業を進める準備をしていきたい。

②雑誌

成果

高知県まんがBASEに向けて段ボール94箱（2,080冊）を高知に送付する準備を進めた。

課題

コロナの影響で分類作業、発送作業が遅滞。高知県まんがBASEでは受入れのスペースが逼迫してきたので多くを香美市の大栃高校跡に移送してきた。今後は新たな雑誌の受入れ施設を所蔵館ネットワークを通して開拓する必要がある。

今年度ここでは「ゲンガノミカタ展」を行ったので、次は自治体連携会議に参加している各施設と協力してこれと対になる「ザッシノミカタ展（仮称）」の準備を進めていきたい。

●段ボール活用法

成果

今回の事業では用途に合わせた特注の段ボール（利活用BOX）が効果を発揮した。分類が終わった本をどうまとめるか、中身がすぐ分かるように一覧性をどう確保するか、出来上がったパッケージをどう収納していくかなどの課題解決に最も役立ったのが、用途に合わせた段ボールの存在だった。

課題

特注の段ボールを作っていくためには何度も実験を重ねて改良を加えていく必要があり、それには費用がかかる。今回は段ボール業者の技術協力を得られたのでコストは抑えられたが、今後は大量作成のための木型製作費や見本製作費がかかってくるので予算確保が課題となる。将来的にはできるだけ多くの施設にこの段ボールを利用してもらうことでコストダウンを図っていきたい。

第3章 実施内容



図 3-6 段ボール製 刊本利活用 BOX（セット用）



図 3-7 段ボール製 刊本利活 BOX（高知まんが BASE）

【令和2年度アンケートのさらなる分析について】

令和2年度（2020年度）事業内で実施されたアンケート調査の詳細分析を行った。この調査は平成31/令和元年度（2019年度）事業において実施された公共図書館を対象とする刊本の利活用に関

第3章 実施内容

する調査の第2弾として意図されたものであり、全国の大学図書館を主たる対象とする調査である。アンケートの送付対象1,025件（マンガ関連施設58件、大学795件、短大44件、専門学校129件）のうち、有効回答は370件（回収率36%）である。対象となるカテゴリの母数にばらつきが大きいので、回答の内訳についてもカテゴリ別に考える必要がある。各カテゴリの回答数、回収率については以下の表のとおり。

表3-1 カテゴリ別の回答数及び回収率

	回答数	回答率 (%)
マンガ施設	31	53.4
大学	310	39.0
短大	12	27.3
専門学校	17	13.2

「Q.1 マンガ単行本・雑誌の収集に関心がある」に対する回答は全体でY:177件（48%）、N:185件（50%）となり、各カテゴリの実数は以下の表のとおり。

表3-2 Q.1のカテゴリ別回答実数

	YES	NO
マンガ施設	26	5
大学	131	171
短大	8	4
専門学校	12	5

「Q.2 マンガ単行本・雑誌を既に収集している」に対する回答は全体でY:228件（62%）、N:88件（24%）となり、各カテゴリの実数は以下の表のとおり。

表3-3 Q.2のカテゴリ別回答実数

	YES	NO
マンガ施設	25	4
大学	190	72
短大	7	4
専門学校	6	8

「Q.3 収集しているマンガの分量」に対する回答を単行本、雑誌それぞれに冊数の階級区分を設けて分類すると以下の表のような分布になる。

第3章 実施内容

表 3-4 マンガ単行本の蔵書規模に応じた各カテゴリの施設数

	マンガ施設	大学	短大	専門学校	計
100,000 以上	3	0	0	0	3
50,000 ~ 99,999	4	0	0	0	4
10,000 ~ 49,999	2	1	0	0	3
5,000~9,999	7	1	1	0	9
1,000~4,999	5	25	0	2	32
500~999	1	22	1	0	24
100~499	3	71	0	4	78
100 未満	1	72	2	2	77
計数不能	1	13	1	0	15

表 3-5 マンガ雑誌の蔵書規模に応じた各カテゴリの施設数

	マンガ施設	大学	短大	専門学校	計
100,000 以上	0	0	0	0	0
50,000 ~ 99,999	3	0	0	0	3
10,000 ~ 49,999	1	0	0	0	1
5,000~9,999	2	0	0	0	2
1,000~4,999	1	0	0	0	1
500~999	2	0	0	0	2
100~499	4	3	0	0	7
100 未満	5	9	0	3	14
計数不能	2	3	0	0	5

「Q.4 将来的にマンガの収集を行いたい」に対する回答は全体で Y:58 件(16%)、N:153 件(41%)となり、各カテゴリの実数は以下の表のとおり。

第3章 実施内容

表 3-6 Q.4 のカテゴリ別回答実数

	YES	NO
マンガ施設	7	6
大学	47	135
短大	1	4
専門学校	3	8

以上の四つの設問に対する回答を総合すると以下のように考えられる。すなわち、一見マンガ刊本の収集に関心が高そう（Q.1のY：48%）だが、実際のところマンガ刊本の収集、とりわけ雑誌の収集に前向きな施設は、マンガ関連施設以外ではほとんど存在しない。単行本に関しても、各施設において必要性が認められればその都度購入するので（その方が安上がりである）、刊本プールの副産物として大量に発生する複本の送り先としての需要は余り期待できない。

過年度に実施された公共図書館を対象とする調査でも明らかな傾向として書庫の狭隘[きょうあい]化が顕著であったが、大学図書館についてもこの点は同様であり、マンガ刊本の収集に関心があったとしても現実的に新たなスペースの割当てを期待できる状況にはない。さらに、大学図書館の場合は、図書としての受入れ基準が厳しい（娯乐的なものとしてマンガを排除する傾向も強い）ため、既にマンガ研究に類する分野の教員が在籍している大学以外では取り付く島もない。

また、マンガ刊本の収集に前向きな回答をしている機関であっても、基本的には学習マンガ及びそれに準ずるものを受入れの対象と考えている。この点も傾向としては公共図書館の場合と類似している。

一方、マンガ関連施設からの寄贈の希望は万単位の冊数で存在している。この理屈だと刊本プールの在庫は増えるばかりである（調べる前から当然の結果ではあるが...）。複本をうまく循環させるのは現実的にはかなり難しく、雑多な資料群から残すべきものをうまく選別する仕組みを作らなければならない。

公共図書館、大学図書館ともに雑誌に対する受入れニーズは著しく低いのが、逆に、だからこそマンガを専門的に扱う施設においては、研究資料アーカイブとして雑誌をきちんと保存する必要がある。刊本ネットワークを通じて、既に雑誌を多く所蔵している施設同士が円滑に連携していくための共通のインフラ整備が望ましい。

3.3 刊本プールの有意性に関する検討

刊本プール検討部会での検討結果を以下の提言（＝「刊本プール整理手順についての提言」）としてまとめ、来年度の活動方針を定める基礎資料とした。

第3章 実施内容

以下の 1) ～4) として掲げる企画案は、マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究において、アーカイブの現場に務めるメンバーで構成された諮問的立場である刊本プール検討部会が、事業の目的に沿って提言する。

1) 目的

マンガ刊本の資料保存を検討する中で、既に実験的に稼働している刊本プール（森野倉庫/特定非営利活動法人 熊本マンガミュージアムプロジェクト）を場に想定し、今後の利活用にスムーズにつなげるため、保存資料と活用資料の判別方法を考える。

2) 手順

- (1) 箱開け
- (2) 正本複本チェック
- (3) 箱詰め

3) 手順詳細

(1) 箱開け

森野倉庫内の資料の多くは箱詰めされた状態で保管されているため、まずは作業しやすい場所を確保し、箱を移動させ、開封作業から始まる。作業スペースの確保、今後の作業量の確認を迅速、的確に行うためには森野倉庫内への新規量の受入れの休止もあり得る。

(2) 正本複本チェック

保存すべき資料と利活用する資料の判別を行う。現段階で既に保管資料が倉庫を圧迫している状況であるため、利活用資料を特定し迅速な倉庫外への放出を一つの目標と考え、現段階では保存すべき資料を森野倉庫内の 1 冊目（正本）とし、森野倉庫内で同資料 2 冊目となるものは、利活用する資料（複本）とする。正本複本の判別は ISBN と書名、著者名、出版社を主な手掛かりとし、原則 ISBN の一致をもって同資料と判定する。ISBN の記載がない資料は、現段階では全て正本として扱う。

判別のための資料の正複チェックには、メディア芸術データベースから提供されているデータセットを活用したチェック用ツールを作成、又は民間の本整理アプリなどを利用し、ISBN をスキャナーで読み取り照合をかけての正複の判定を考えている。メディア芸術データベースを活用した資料の正複チェックは過去の事業内でも例があり、メディア芸術データベースからのデータセットの公開と合わせ、実現度が高いと思われる。

(3) 箱詰め

正本と複本を分け、箱詰めして保管する。正本としたものは保存し、今後より詳しく「保存対象とすべきか」を再検討する必要がある。複本は利活用のために森野倉庫外に移動させ、譲渡会などでの放出が可能となる。

第3章 実施内容

4) 今後の展開について

マンガ刊本アーカイブセンター・所蔵館ネットワーク事業全体における正本複本の判断基準は、様々な立場からの視点が必要であり、これからの要検討課題である。また、熊本マンガミュージアムプロジェクトの資料収集理念と当事業の方向性の差異、今後の協力についても確認が必要である。しかしその決定を待つ間も刊本プールへの収集が行われ、保管資料数は増加している。そのため、事業全体の「保管」「活用」の検討と同時に、整理の第一段階としてごく簡易な仕分を実施し、保管すべき資料を迅速に絞り込む作業は、今後のアーカイブやネットワーク参加館の参考になり、事業全体にとって有益だと考える。

今後、資料の所蔵者で、森野倉庫の借主でもある熊本マンガミュージアムプロジェクト、また各所とこの提言書の妥当性を検討の上、了承を得られた際には、速やかに実証実験を行い、人員、時間などのコスト面の確認を行うことが望ましい。

3.4 デジタルアーカイブ化の準備

クママン資料には、クママンの橋本博代表が長年収集してきた「橋本コレクション」がある。これは「ビンテージ資料」と位置付けられる、1980年代以前のマンガとその関連資料であり、その種類は、刊本として、赤本漫画、紙芝居、貸本漫画、初期新書判単行本、マンガ雑誌、雑誌付録、学年誌、児童ムック本、アニメ関連資料など。その他資料として、駄菓子屋の商品（メンコなど紙類のもの）、ポスター、チラシ、ソノシート、レコード、カセットなど。また立体物として、雑誌付録、文具、キャラクターグッズ、カプセルトイなど多種多様にわたっている。

「橋本コレクション」のうち貸本漫画、雑誌付録の一部はこれまでの「メディア芸術連携促進事業連携共同事業」「文化芸術振興費補助金メディア芸術アーカイブ推進支援事業」においてメタデータの作成が進められたが、リソース（人的、費用、時間など）の問題から、データ化されたのはビンテージ資料全体の1割程度にすぎないのが現状である。これらは次世代に残すべき貴重な文化資源であり、今後はデジタルアーカイブ化の一層の促進が必要であるとの認識を両者間で共有した。

クママンが所蔵する雑誌について、昭和55年以前のビンテージ資料を除いたものについては、これまでに約6,000点を高知まんがBASEに移管し、クママン内部でのデータ登録を進められた。

合志MMが収蔵する資料は単行本50,000点、雑誌3,000点である。このうち単行本についてはエクセルで作成した蔵書リストがあるが、これがメディア芸術データベースにメタデータとして活用できるかどうか、事務局に確認したところ、データベースに必要な項目が幾つか欠けているが、ISBNコードを利用して補充すれば、MADBの所蔵情報として追加が可能という回答であった。ただこれまで作成されてきた合志MMのメタデータに不備が多く、登録項目の不足、誤入力、フォーマットの不統一が目立ち、データベース入力の際の細かなルールが浸透していない点が課題である。実験的に一部のデータの補充作業を行ってみたが、本格的な作業は来年度以降に行う運びとなった。今後、所蔵館ネットワークを展開していく上で合志MMの事例は大いに参考になると思われる。また、今

第3章 実施内容

年度合志 MM では Google Art & Culture が進めている「デジタルミュージアムプロジェクト」に参加したが、その際に著作権の処理が課題とされた。今後デジタルアーカイブ化を進める際にはこの問題は避けて通れないので、来年度以降に検討会議を開く予定である。

3.5 「マンガアーカイブ協議会」の開催

原画、刊本両事業の合同会議として昨年度（令和2年6月23日）に立ち上げられた「マンガアーカイブ協議会」を今年度も主催（第2回会議：令和3年12月14日）した。原画・刊本両事業に関わる連携機関が一堂に会し、各連携機関の情報が共有された。

ここで改めて議論となったのが情報共有の仕組み作りである。今年度は「マンガアーカイブ協議会」はメンバーが集まる（オンライン）会議を2回開催したわけだが、各連携機関に寄せられる個別の相談案件について全体で共有するのに最大半年待たなければならないというのでは、余りに時間がかかりすぎてしまう。もちろん、現在の各連携機関同士の関係性としては、即座に連絡を取り合えるので半年に一度の会議を待つまでもなく情報共有自体は可能であり、実際はそのように動いている。問題は、情報を共有する仕組みが制度化されていないため、わざわざ個別に（個人的に）連絡しなければならないということである。今後ネットワークが拡大して構成メンバーが増えたときのことまで考えるなら、もっと気軽に（半ば自動的に）情報が共有されるシステムが整備される必要がある。原画・刊本それぞれにというよりは、全体をカバーする「マンガアーカイブ協議会」として広く情報を共有する仕組みが必要だとすると、これを取りまとめる組織が別途存在するのが望ましい。仮にこうした組織を維持できるのであれば、恐らく相談する側にとっては必ずしも区別の明瞭ではない原画・刊本の別を問わないマンガ資料に関する総合的な相談窓口も、この組織が担うことになるはずである。

3.6 実施会議内容

3.6.1 会議の詳細

【マンガアーカイブ協議会】

第1回 令和3年7月16日（金）10：00～12：00 高知まんが BASE 会議室、並びに WEB 会議参加（Zoom にて開催）

「マンガ原画アーカイブセンターの実装と所蔵館連携ネットワークの構築に向けた調査研究」、「マンガ刊本アーカイブセンターの実装化と所蔵館ネットワークに関する調査研究」の2事業のメンバーが集まり、今年度の事業計画とスケジュール、役割分担を確認した。

- ①参加者の紹介
- ②挨拶
- ③議事

1.令和3年度刊本事業の取組について

- ・事業説明、質疑応答

第3章 実施内容

2.令和3年度原画事業の取組について

- ・事業説明、質疑応答
- ・収益事業（ゲンガノミカタ展）についての情報共有

3.原画・刊本での連携・協力体制の構築について

④事務連絡

参加者：吉村和真、イトウユウ、大石卓、表智之、ヤマダトモコ、池川佳宏、安田一平、鈴木寛之、橋本博、吉村和世、中平麻矢

オブザーバー：＜文化庁＞堀内 威志、椎名 ゆかり、吉光 紗綾子、中西 睦美、牛嶋 興平
＜メディア芸術コンソーシアム JV 事務局＞高橋 知之、井上 和子、森 由紀、後藤 流音、酒井 淳一郎、檜崎 羽菜、藤本 真之介、佐原 一江、横江 愛希子

第2回 令和3年12月14日（火） 15:00～17:00 熊本大学文法学部棟2階 共用会議室（H242号室）並びにWEB会議参加（Zoomにて開催）

関係の各施設における事業進捗状況の確認と情報共有、最終報告会及び実施報告書作成に向けての作業の確認を行った。

①参加者の紹介

②挨拶

③議事

- ・令和3年度 マンガ刊本事業の取組について
事業説明、質疑応答
- ・令和3年度 マンガ原画事業の取組について
事業説明、質疑応答
- ・原画・刊本での連携、協力体制の構築について
- ・令和4年度 事業計画

④事務連絡

参加者：吉村和真、イトウユウ、大石卓、表智之、ヤマダトモコ、池川佳宏、安田一平、木村仁、鈴木寛之、日高利泰、橋本博

オブザーバー：＜文化庁＞椎名ゆかり、吉光紗綾子、中西睦美、牛嶋興平
＜メディア芸術コンソーシアム JV 事務局＞高橋知之、藤本真之介、佐原一江、横江愛希子、蒲生みゆき

第3章 実施内容

【マンガ刊本ネットワーク会議】

第1回 令和3年6月1日（火） 14:00～15:30 WEB会議（Zoomにて開催）

今年度の「刊本事業」全体の役割分担について意見交換をし、分担案を定めた。

- ①参加者の紹介
- ②マンガ両事業（原画・刊本）の事業開始に向けて
吉村 和真（京都精華大学専務理事）
- ③議事 ※事業開始会議を含む
 - ・マンガ刊本事業における今年度事業計画の共有
 - ・部会における実施内容及び各役割分担の確定
 - ・各施設の近況報告
 - ・第2回ネットワーク会議に向けての内容協議
- ④事務連絡

参加者：吉村和真、鈴木寛之、イトウユウ、橋本博、三崎絵美、田中千尋、渡邊朝子、日高利泰、
吉村和世、中平麻矢、チャムネス薫

オブザーバー：＜文化庁＞堀内威志、椎名ゆかり、吉光紗綾子、中西睦美、牛嶋興平
＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞高橋知之、後藤流音、藤本真之介、
横江愛希子

第2回 令和3年10月23日（土）※3部構成

1. 10:00～11:30 熊本大学（黒髪北地区）文・法学部棟4階「現代文化資源学学生研究室」（H429号室）

「刊本ネットワーク施設による情報共有及び意見交換会」

- ①本事業の全体像の確認
 - ・各連携先からの取組報告
（明治大学米沢嘉博記念図書館・京都国際マンガミュージアム・高知まんがBASE・北九州市漫画ミュージアム・合志マンガミュージアム）
- ②各連携館による意見交換

2. 13:00～14:30 熊本大学 くすのき会館 レセプションルーム

「刊本アーカイブセンター設置に向けた刊本ネットワークの形成」

- ①公立図書館・大学図書館等を含む連携候補先のリスト化
- ②昨年度の大学図書館・マンガ関連施設等を対象に実施した刊本収蔵に関するアンケートの分析
- ③大学・NPO・マンガ関連施設・図書館等が連携した刊本アーカイブ活動の実施
- ④刊本アーカイブセンター設置に向けた外部ヒアリング

第3章 実施内容

3. 15:00～16:30 熊本大学 くすのき会館 レセプションルーム

「刊本事業における「刊本プール」の役割・今後の展望」

- ① 「刊本プール」の事業内での位置付けについて
- ② 「刊本プール」の実績と課題
- ③ 「刊本プール」にて必要となる管理システム（DB）について
- ④ 今後のネットワーク構築に向けた計画、候補先の検討

*課題と展望 今年度の「アーカイブセンター設置スケジュール」の確認

参加者：吉村和真、鈴木寛之、イトウユウ、日高利泰、中平麻矢、西村淳、田中千尋、橋本博、
三崎絵美、渡邊朝子

オブザーバー：＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞高橋知之、後藤流音、藤本真之介、
横江愛希子

【参考】

参考①

「刊本プール」検討メンバー打合せ

場所：熊本大学 文・法学部棟2階 応接室

日時：10月24日（日）10時00分～11時30分

参加：イトウユウ、渡邊朝子、三崎絵美、田中千尋、日高利泰

参考②

「マンガ県くまもと」をめざして キックオフシンポジウム ＜参加任意＞

場所：ホテル日航熊本 5階「天草の間」（熊本市中央区上通町2-1）

日時：10月24日（日）13時30分～15時40分

主催：熊本日日新聞社

共催：国立大学法人 熊本大学

後援：熊本県

協力：文化庁メディア芸術連携基盤等整備推進事業、

NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト、株式会社くまもと DMC

第3章 実施内容



図 3-8 第2回マンガ刊本ネットワーク会議（令和3年10月23日）

【マンガ刊本アーカイブセンター設置準備委員会】

第1回 令和3年8月24日（火） 10：30～12：00 WEB会議（Zoomにて開催）

マンガ刊本アーカイブセンターの将来的な設立に向けた年間計画を策定し、各部会における役割分担を決め、部会ごとの目標値を設定・共有した。

①参加者の紹介

②議事

- ・マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた現状共有
- ・センター設置に関わるネットワークモデルケース（熊本県内の実践事例）
- ・センター設置に向けた公開シンポジウムについて
- ・今後のロードマップについての意見交換
- ・次回会議に向けて

③事務連絡

参加者：吉村和真、イトウユウ、鈴木寛之、橋本博、日高利泰

オブザーバー：＜文化庁＞吉光紗綾子、牛嶋興平

＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞高橋知之、森由紀、後藤流音、
檜崎羽菜、藤本真之介、横江愛希子

第2回 令和4年1月11日（火） 13：30～15：30 WEB会議（Zoomにて開催）

①参加者の紹介

②議事

第3章 実施内容

- ・マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた現状共有
- ・センター設置に関わるネットワークモデルケース（熊本県内の実践事例）
- ・センター設置に向けた公開シンポジウムについて
- ・今後のロードマップについての意見交換

③事務連絡

参加者：吉村和真、イトウユウ、鈴木寛之、橋本博

オブザーバー：＜文化庁＞椎名ゆかり、中西睦美、牛嶋興平

＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞高橋知之、藤本真之介、横江愛希子

＜議事メモ＞

- ・刊本センター＝収蔵施設の窓口で、連絡調整が目的。倉庫そのものではない。
- ・全国各地に収蔵施設を設置し、刊本アーカイブセンターと連携できる仕組み作りを考える。
- ・設置準備委員会＝その基盤を整理し、必要なものや予算などを考えるための会議体。
- ・（アンケート結果について）マンガの収蔵をしてくれる施設は、マンガ関連施設以外ではなかなか厳しい。学習マンガだけなら良いというところや、必要な単行本を必要なときにだけ購入するという施設が多く、雑誌の保存については想定されていない。大学もマンガ関係の専門の教員がいないところは収蔵に消極的。マンガ関連コースがある専門学校はまだ積極性がみられる。

→マンガ雑誌が収蔵するに足る価値あるものであるとの認識を、今から既存施設に根付かせるのは容易ではないが、その意味ではゼロから作る施設の方がまだ容易かもしれない。

- ・複本利活用の問題。刊本プール（森野倉庫）はなるべく抽出された正本を保管する施設として利用し、複本は他施設での利活用あるいは廃棄する方針とし、来年はその実証実験をしたい。
- ・「正本」抽出作業がアーカイブセンターとしての柱で、複本の利活用はクママンやくまもとマンガ協議会の事業と、切り分ける必要がある。

→「刊本プール」の運営コストを図るための実証実験を来年度行う。

→正本の抽出をする際には、複本のリストも作らないといけない。原則として文化庁事業では複本利活用は扱わないにしても、リスト化しておかないとその後の利活用ができないため。

→今後は機械的に複本の仕分処理ができないといけない。

【刊本プール検討会議】

第1回 令和3年9月10日（金） 10:00～12:00 WEB会議（Zoomにて開催）

今後の刊本事業で必要となる「刊本プール」の規模・機能・役割について検討し、施設の運用マニュアルに必要となる項目案について協議した。

①参加者の紹介

②議事

- ・マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた現状共有について
- ・刊本プールに関する検討事項について

第3章 実施内容

- ・今後のロードマップと役割分担について
- ・次回（第2回）会議に向けて

③事務連絡

参加者：鈴木寛之、イトウユウ、三崎絵美、田中千尋、渡邊朝子

オブザーバー：＜文化庁＞椎名ゆかり、中西睦美、牛嶋興平

＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞後藤流音、藤本真之介、横江愛希子

第2回 令和4年1月11日（火） 10:00～12:00 WEB会議（Zoomにて開催）

①参加者の紹介

②議事

- ・マンガ刊本アーカイブセンター設置に向けた現状共有について
- ・刊本プールに関する検討事項について
- ・来年度のロードマップと役割分担について

③事務連絡

参加者：鈴木寛之、イトウユウ、橋本博、三崎絵美、田中千尋、渡邊朝子

オブザーバー：＜文化庁＞椎名ゆかり、中西睦美、牛嶋興平

＜メディア芸術コンソーシアムJV事務局＞高橋知之、藤本真之介、横江愛希子

＜議事メモ＞

- ・正本の抽出時に出てくる「複本」について。全て廃棄するのが前提なら、特に考慮する必要はないが、仮に刊本プールを作ってきてきちんと運営する方針でいく場合は、緻密なコスト計算が必要となる。
- ・シミュレーションのために正本・複本目録作成に来年度着手する。実際にどこで活用するかは別にして、所蔵情報をまとめておく。
- ・ISBNのあるものに関しては、国立国会図書館（NDL）／メディア芸術データベースを参照。
→どこにも所蔵・登録されていない刊本は特に大切に保管。
- ・正本目録を公開することで、全国のコレクターなどとの連携も可能になるのでは。
- ・リスト化した刊本の重要度に従って、保管の仕方を考える必要も出てくる。
→原画のプールは全て永久保存が前提だが、雑誌は必ずしもそうではない。
→（目録やデータベース的には）全国に1冊しか確認できない雑誌（「正本」）などが正しい形で保存されているとは言えない状況もある。そうした現状を可視化する必要がある。
- ・原画事業のときのシンポジウムを参考にして、刊本事業の公開シンポジウムを熊本大学主導で来年度の半ば以降に開くことで合意した。マンガ刊本アーカイブセンター（AC）の設立意義を広く説くためである。
- ・最初から大掛かりなものを作る必要はないが、刊本プールの所蔵リストを整備していく必要がある。
- ・全国的な「ブロック制」というか、県外にも収蔵施設を募っていきたい。
- ・文化庁の刊本アーカイブ事業として、複本の活用が本義にならないよう注意する。複本の活用では

第3章 実施内容

なく、飽くまで「アーカイブ」が主旨の事業である。

3.6.2 各施設における収書の範囲と方針

【京都国際マンガミュージアム】

マンガとその周辺資料ということで、国内外の雑誌と単行本、研究書・参考書などを、特に時代や国・地域を限定せずに収集している（現在最古の資料は江戸時代の古典籍）。

収蔵スペースに余裕がない状況は周知済みだが、寄贈の依頼は断続的に入ってくる状況である。

【明治大学 米沢嘉博記念図書館・現代マンガ図書館】

収集については、明治大学マンガ図書館規程として「日本のマンガ、アニメ等の資料を収集」との大枠が明示されている。米沢嘉博記念図書館は米沢氏の所有していた資料整理を中心の業務とし、現代マンガ図書館も独立運営されていた頃よりの継続した資料の購入など、両館ともに既にあるコレクションを蔵書の基としており、その方向性を受け継ぎつつ紙媒体資料の収集整理を行っている。しかし、マンガジャンルの多様化や、1冊から持ち込まれる寄贈資料の検討など、資料をどのように収集、保存、公開すべきか判断を必要とする場面が多々発生し、収集方針の作成が必要な時期に来ていると感じる。

また電子化された資料の取扱いなど、日々知識と情報をアップデートして臨むべき案件もある。当館のみならず、広くマンガ資料を取り扱う施設で専門的な知見の共有や伝授・継承などの場の設定と、その蓄積を系統立てて公開するような環境の確立が、専門図書館としての独自性のある蔵書構築や、時事に添った資料の適切な収集につながると考える。

【北九州市漫画ミュージアム】

当館の資料収集は、利活用に重きを置いて書架運用している図書資料と、恒久保存を目的としふだんは収蔵庫で保管する学芸資料の2系統があり、ここでは主に図書資料について述べる。当館の定める「資料収集要綱」に基づき、公共施設としての役割、利用者各層の要求及び社会的な動向を十分配慮して、市民の文化、教養、調査、研究、趣味、娯楽等に資する資料を選定・収集。ゆかり作家の作品や歴史的な名作に加えて、近年の人気作や外国マンガの邦訳、マンガやアニメ等の研究書・事典の類も収蔵することが特徴。

選書は漫画賞・ランキング・書評・アニメなど他メディアへの展開を参考に独自に判断。全年齢に推奨できる「ファミリー (F)」と、中高生～大人に推奨する「ユース&シニア (YS)」の区分を、連載誌の性質と内容を基に判断して配架している。

形態は開架運用に適したもの（堅牢 [けんろう] で再入手が困難でない）に絞り、雑誌・廉価版単行本・同人誌・パンフレット・電子書籍データなどは収集しない。出版社の自主規定による「成年コミック」や、何らかの問題で出版社が市場から回収したものも対象外。

なお学芸資料は、北九州ゆかり作家の業績を収集。単行本は版型違いや再編集版も含めて網羅

第3章 実施内容

的に収集するが改版・増刷は考慮していない。掲載雑誌は連載開始・終了号など資料的価値の高いものを優先。ほかに、ゆかりの作家を取り上げたマンガ・アニメ情報誌や、ゆかりの作家に関するもの以外でも、当館開催の展覧会・イベントに関わるものも適宜入手し収集している。

図書・学芸に共通する課題としては、市の会計手続上、古書購入が困難なことが大きい。稀覯[きこう]本の類はもちろん、古い損耗資料の買い替えや、近年は新刊の刷り数が抑えられ、品切れ重版未定となるサイクルが早く、新刊の購入にすら苦慮するケースが多い。寄贈頼みでは賄えない部分が大きく、資料を融通し合える仕組みの実現を本事業には求める。また選書についても、専門施設同士でリストを共有し相互に参照すれば、より質の高い収集を効率的に進められると考える。

【合志マンガミュージアム】

当館の蔵書は、クママンの代表理事でもある館長の個人コレクションが中心となっている。そのほか、全国のマンガ関連施設、コレクターから寄贈される資料のうちミュージアムに在庫がないものを抜き出して蔵書に加え、残りはクママンが運営する刊本プールに回して国内外の施設に寄贈、貸与を行っている。蔵書数は開架閉架合わせて5万冊であるが、全国からの寄贈を受けているので収蔵スペースの限界に近づきつつあるのが課題である。

当館では日本を代表するオリジナルコンテンツである妖怪、忍者、漫画を三本柱とする「YO・NIN・MAN（妖忍漫）ミュージアム」を目指しており、毎年「忍者の日」（2月22日）、「妖怪の日」（8月8日）、「まんがの日」（11月3日）などの機会にイベントや展示を行い、関連マンガも収集している。

付録 1 刊本アンケート分析

【平成 31/令和元年度アンケートのさらなる分析について】

平成 31/令和元年度の刊本事業において行われたアンケート調査の概要は以下のとおりである。日本図書館協会加盟の公共図書館から抽出した 1,474 件へ調査票送付。このうち 696 件(回収率 47%)から回答があり、そのうちの 79% (548 件) でマンガ史資料の収蔵が既に行われており、収蔵数が 1,000 冊を越える施設がその約半数 (267 件)、1 万冊を超える施設が 29 件。「共同保管倉庫 (刊本プール)」からの本の受入れについても 165 件 (24%) が受入れ希望と回答している。

上記回答内容からそれなりの関心の高さは分かった一方、課題も多く、(1) スペース不足、(2) 予算不足、(3) 人員不足、(4) 資料収集方針との不整合などが主要な問題として挙げられている。総合すると、マンガ刊本アーカイブセンターないし刊本アーカイブネットワークに対しては「権威ある専門的知見に基づいて、公立図書館向けに適切に選書された資料群を、恒久的な収蔵ではなく一時利用の形態で、輸送費の負担なく提供すること」が求められていると結論付けられた。

全体の傾向としてはこうした理解で間違っていないが、一口に公共図書館と言っても設置主体や館種、規模の違いによって期待される役割が異なっている点にも注意が必要である。例えばマンガの収蔵に関心があると答えた施設の数を地方ごとにまとめると以下のようなになる。

表 3-1 地域別アンケート回答件数

地方	合計	都道府県立	市町村立
北海道	90	1	89
東北	55	3 (青森、宮城、福島)	52
関東	107	3 (茨城、栃木、東京)	104
中部	87	4 (新潟、富山、山梨、静岡)	83
近畿	62	1 (大阪)	61
中国四国	58	6 (鳥取、広島、山口、徳島、愛媛、高知)	52
九州沖縄	78	3 (宮崎、鹿児島、沖縄)	75

関心の持たれ方に、かなりばらつきのある実態が分かる (相対的に近畿では関心が低く、中国四国では関心が高い) が、別項目の回答をよく読むと「関心なし」と答えた中でも「郷土作家であれば収

蔵する」などの記述が複数存在するため、関心そのものはもう少し大きく見積もっても良いだろう。ただし、「郷土作家であれば収蔵する」といった場合にも、都道府県立が長期的な保存を前提としているのに対して、市区町村立は必ずしもそうではなく、短期的な消耗品としての配架を前提とする基本姿勢の違いを認識しなければならない。

以上を踏まえると、(刊本事業における当面の課題としての) 既にある複本の受入先としての連携館と、目指すべき刊本アーカイブネットワークの連携館を、一旦切り分けて考えるべきである。ここで改めて、目指すべき刊本アーカイブネットワークとは一体どのようなものなのかというビジョンが問われることになる。何を、どの範囲で、どうやって収集・保存するのかという根本的な問題であり、今後の事業の中で原画・刊本の両方にまたがる大きなビジョンを明確化する議論も積み重ねる必要がある。

また、具体的な記述の分析から分かる内容として以下の3点が指摘できる。(1) 単行本については受入れ可能性がある一方、雑誌には全くニーズがない(2) 受入れ可能性があるのは、郷土、名作、学習のカテゴリがほとんど(3) 複本の受入れが可能な場合も数十冊程度の規模がほとんど(500冊以上受入れ可能：5施設、100冊以上受入れ可能：30施設)。

今後、マンガ刊本アーカイブセンターないし刊本アーカイブネットワークで(公共図書館との連携に関して) 行うべき作業は、差し当たり以下の4点にまとめられるだろう。(1) 公共図書館向けのマンガ選書基準の策定(2) 郷土、名作、学習といったカテゴリのパッケージ化(3) 相互貸借や汚損資料補充などのニーズへの対応(4) 長期的な保存と複本を回転させる仕組みの役割分担を明確化。また、来年度の取組として受入れ可能冊数の多い5施設と相談の上、資料移送の実施も検討したい。

付録2 「刊本プール」検討事項

来年度に向け、今年度の「刊本プール」検討部会での協議に基づき以下の事項を確認した。

〈刊本事業における目的・課題〉

（目的）

・刊本事業の最終的な目的は、全国の刊本ネットワークの中で、正本の1セットをアーカイブ（収集／保存・管理／活用）すること

（課題）

・現状このネットワークの中には、資料の〈永久保存型〉施設（明治大学米沢嘉博記念図書館、京都国際マンガミュージアムなど）と〈消耗型〉施設（高知まんがBASEなど）が混在しているが、そのことをどう考えるか？

・ネットワークで共有できる（所蔵）データベースをどう構築するか？

・実験的に「刊本プール」として稼働させている森野倉庫の資料が（合志マンガミュージアムなどではなく）クママンの所蔵資料であることにどう対応するか？

〈刊本プール検討部会における目的〉

（目的）

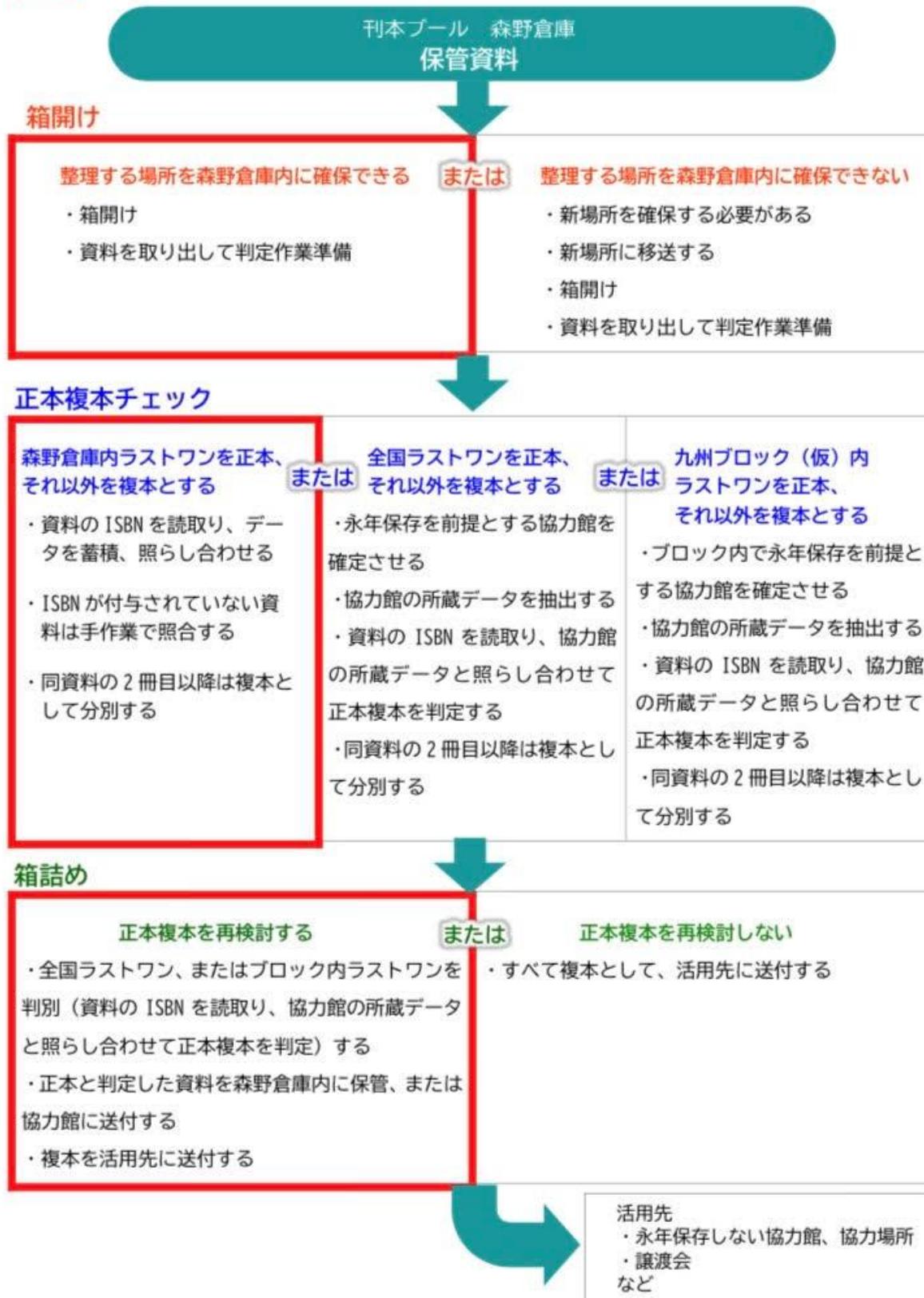
〔1〕マンガ刊本アーカイブセンター（AC）として「収集」した刊本の仮の「保存・管理」施設＝「刊本プール」の在り方について検討する。

〔2〕実際に「プール」的な場所として設定されている森野倉庫に「収集」された刊本の「保存・管理」の具体的な方策について提言する。

（※今後の森野倉庫の整理手順案については次ページからの図のとおり提言する。）

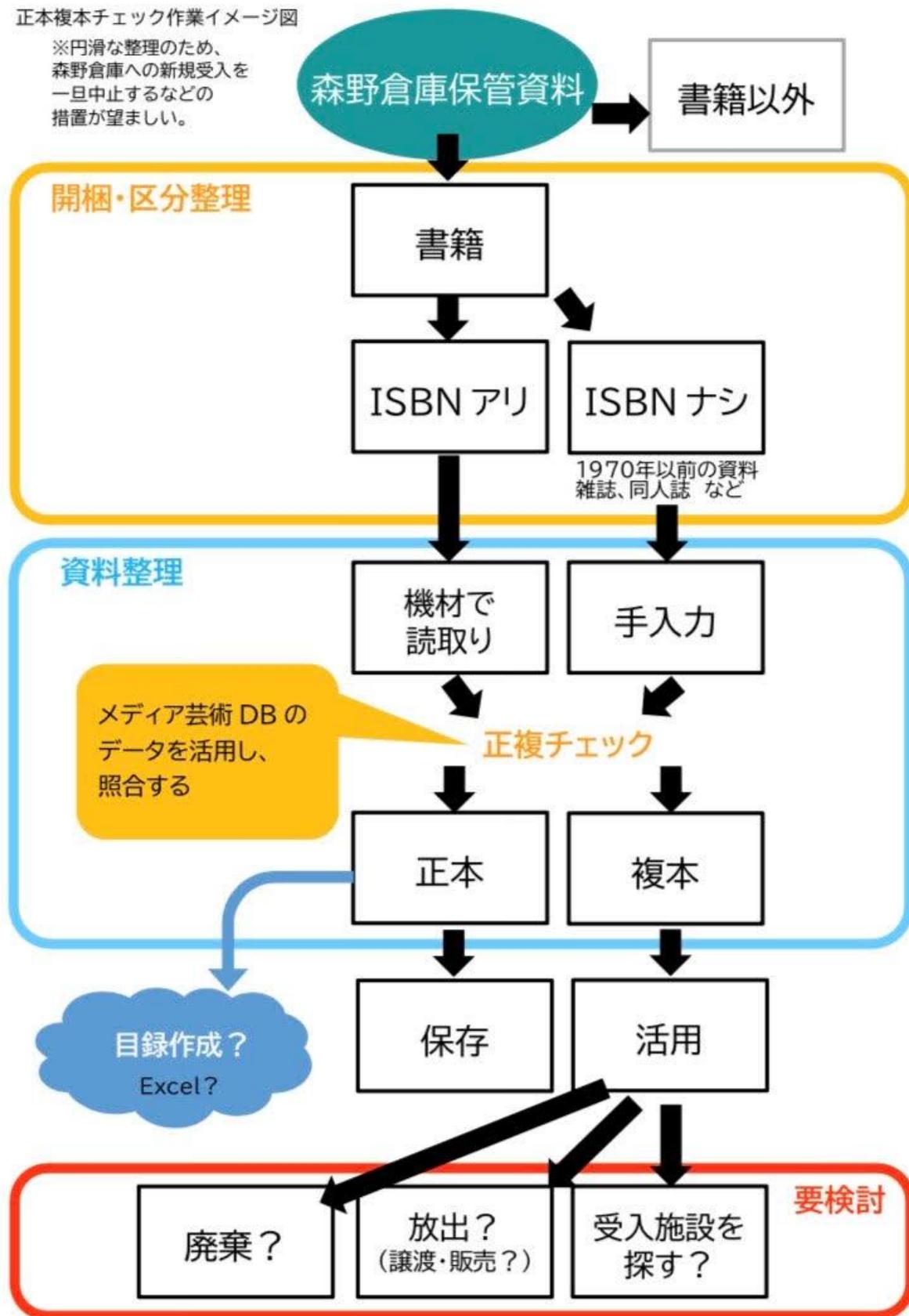
刊本プール 正本複本判別イメージ図

→採用想定



正本複本チェック作業イメージ図

※円滑な整理のため、森野倉庫への新規受入を一旦中止するなどの措置が望ましい。



本報告書は、文化庁の委託業務として、大日本印刷株式会社が実施した令和 3 年度「メディア芸術連携基盤等整備推進事業 分野別強化事業」の成果をとりまとめたものであり、第三者による著作物が含まれています。
転載複製等に関する問い合わせは、文化庁にご連絡ください。